

退職記念講演会（講演抄録）

# 横井小楠と現代社会—現代社会の論理を超えて

## Yokoi Shonan and Modern Society — Beyond the Logic of Modern Society —

山 崎 益 吉 教授

### 一. 問題意識

私は、これまで、経済主義を克服する道はあるのかを念頭に置き、いろいろな角度から検討してきた。一つの解決策として、儒教とくに朱子学に論点を据え、今日に至っている。道半ばと言いたいが、正直、緒に就いたばかりだ。糸口として、先ず、横井小楠の緒論、『国是三論—富国論—』、『沼山閑話』、『沼山対話』等を手がかりに道を探ってみたい。

つねに、仏教、神道など伝統的な道がよぎっている。だが、その余裕はない。この点については今後の課題としたい。さらに、西洋経済学とくにアダム・スミスを中心とする人達も念頭にある。経済主義は、ベルナー・ゾンバルトの *das oekonomische Zeitalter*（経済主義時代）からヒントを得ている。

### 二. 横井小楠と明治維新

明治維新のスローガンは尊王攘夷であった。尊王は政治の問題であり、攘夷は経済の問題である。

まず、尊王の問題に横井小楠がどう関わっていたかを見よう。

- (1) 当時、政権は依然として徳川が担当するという立場、
- (2) いや、徳川にその能力がないから朝廷を中心と考える一派、
- (3) どちらもその能力はない、従来の考えを一掃し、ここは全国から有能な人材を集め公議公論体制を敷く以外に最大の難局を乗り越えられないとする考え、

この第三の考えが浮上する。公議公論体制を敷くという立場に横井小楠の考えがすえられた。横井小楠は公議公論体制をどこから持ち出してきたのか。当時、開明思想家と謳われた人たちの多くは、西洋思想に強い影響を受けていた。福沢諭吉を中心とする人達を考えればよくわかる。しかし、横井のように手持ちの思想（松浦玲『横井小楠』参照）を駆使し公議公論思想に到達した人もいる。朱子学（儒教）を究極的に煮詰めこの立場に到達した。この立場を強調した人は横井を嚆矢としよう。ほとんどが西洋合理主義に走っていくなか、横井はそれを「堯舜孔子の道」で受け止め、「西洋器械の術」よりも優れていると見た。富国という次元、強兵という次元で留まっていることへの

警告である。「堯舜孔子の道」の方が西洋覇権主義より志が上であると見ている。こちらの方に大義があると考え、「大義を四海に敷かんのみ」というわけである。この点は福沢諭吉や佐久間象山とは方向を異にしている。

### 三. 経済の論拠

攘夷の問題は裏を返せば経済の問題である。洋務派の考えは遠くアダム・スミスの自由交易論に間接的に依拠している。横井小楠も海外からの知識がないとはいえないが、基本的には朱子学を煮詰めた結果として、自由交易論に到達していると考えていい。交易はなにも海外との関係だけでなく、国内における物資の融通もみな交易であるとする立場である。「天地間固有の定理」の立場だ。国に拘る必要はなく、有道な国が交易通信を求めてきた場合拒絶する理由はないとする。無論、無道の国は拒絶しなければならないが、友好的な国が開国を求めてきたならば拒絶する必然性はない。交易の視点は一般と異なる。「天地間の定理」に覇権主義の発想はない。数年後、横井小楠は西洋のやり方、植民地主義を「心徳がない」と一喝するが、偏狭なナショナリズムからではない。問題は自由主義経済の捉え方である。横井小楠は重商主義者であるとする考えが一般的である。交易を「天地間固有の定理」とし、「有道な国」とは通信交易を許すという発想のどこに自由交易論者ではなく重商主義者としてのレッテルをはるという点には理解に苦しむが、この点については別に論じよう。

しかし、次の点だけは言うておく必要がある。アダム・スミスが『国富論』を捧げようとしたケネーは、当時、ヨーロッパの孔子と呼ばれていた。中国からの自然概念の影響が大であったからである。その影響はマテオ・リッチなどの宣教師によってもたらされたものである。スミスはまたヴォルテールから影響を受けたといわれているが、彼は孔子を尊敬し『中国』の項目に孔子の肖像を掲げ仁、義、礼、智などの言葉を書き込んでいたといわれている。ヴォルテールから影響を受けたスミスが『国富論』に儒教からの影響、自然概念を取り入れていたと仮定すれば、自由交易論の源は東洋（中国）にあり、スミスの「自然的自由の体制」は実は儒教に源があったことになる。そういえば、『道徳感情論』には友情、感恩に包まれた社会は豊かかつ幸福である、との表現があるが、儒教との関連性も無視し得ない。横井の自由交易論の背景がこうした視点から打ち出されていることも事実であろう。なおこの点については、これ以上深入りはしないで、詳論は他日を期すことにする。

### 四. 王道外交論

次に近代日本の進路に関する横井の提案を見ておこう。嘉永六（1853）年ペリーが来航する。前年、横井小楠は『文武一途の説』で武力による対応は絶対避けるべきであると強調した。その論は、翌年の『夷虜応接大意』にもよりはっきりとした相（すがた）で登場する。（1）一番困るやり方は何でも叩く立場。（2）次に外国はとにかく強いから降参する立場。（3）一旦外国の要求を受け

入れ、その間に武備を整え、しかる後に叩く。（4）全国から有能な人材を集結させ最善策を考える。王道外交を展開する。

4通りの外交政策で、3番目に注目してみると、近代日本が採った外交ではなかったか。横井小楠はこの方法は覇権主義に陥り、禍根を残すから採るべきではないと強調した。しかし横井小楠を失った近代日本は、西洋を切るその同じ刀で近隣諸国を叩いてしまった。覇権主義をあれほど嫌ったのに、一番避けなければならない道を選択してしまった。これでは、西洋合理主義を「心徳がない」と退ける道はないではないか。本来は、「本然の性」（仁義礼智）で西洋合理主義を受け止めなければならなかったはずなのに、どこで歯車が狂ってしまったのか。今そのツケに汲々としているというのが実情である。「心徳がない」のはこちらになってしまった。横井小楠の言の重みがひしひしと伝わってくる。慶応年間二姫に送った送別の辞、「君子の道身を修むにあり」の重要性を改めて認識する必要があるだろう。

## 五．本然の性の回復

天意（誠）から解放された人間の自然、本性、例えば性欲、権力欲、経済欲等は限りなくその道を追求し今日に至っている。「気質の性」の解放は『大学』が教えるとおりに、中庸、つまり、正道にして定理である。気質の欲望は「偏らず易わず」を本旨とする。一身から始まって四海に共通の理念は「気質の性」の中庸、「本然の性」の回復にある。現代社会は「本然の性」の回復にその運命を託していると言っても過言ではない。

平成20年1月16日 於 附属図書館ホール

